

今後の情報系センターの発展に向けて

大分大学学術情報拠点副拠点長
(情報基盤センター担当)

吉田和幸

情報系センターが運用するシステムは、大型汎用機からダウンサイジングといわれワークステーション中心の分散システムを経て、最近ではブレードサーバを中心とした大規模サーバをセンターシステムの中核に据えるシステムに回帰しているように見えます。しかしながら、そのシステムが提供するサービスは、計算サービスといった研究支援系のサービスに加えて(あるいはそれに代わって)、学内 LAN の運用とそれに付随する DNS サーバ、時刻サーバの運用といった大学全体への情報インフラとしてのサービスや e-Learning System, 演習用 PC システムの運用など教育支援系のサービスなど多岐にわたるようになってきています。さらに、統合認証システムというミドルウェアの運用を通じて教務情報システム等の学内の他のシステムとのかかわりも持ってきています。近年、SPAM メールを初めとして、様々なウイルス、不正アクセス、情報漏えいなど、ユーザを悩ませるセキュリティ関連の問題にも対処する必要性が出てきています。このように情報系センターの役割はますます重要になってきています。しかしながら、システムの運用管理者はそれほど増えておらず、少数の運用管理者に頼った運用になっているのではないのでしょうか？ 人手の足りなさが、安全で安定したシステムの開発や運用技術の進歩の原動力の一つである面は否めませんが、「研究交流・連絡会議」の開催校が数年後には一巡するこの時期に、情報系センターの役割と人的体制について考える必要があるのではないのでしょうか？

組織の永続性には、技術継承と世代交代(人的体制の整備)が必要といわれています。学術情報処理研究 No.13 では、ネットワーク、教育支援、センター運用、セキュリティ管理の分野の原著論文、発表が収められています。本誌は、システムやネットワークの運用技術の課題の整理、議論の場として、貴重な論文誌です。また、今後の各センターの発展に寄与することを願っております。